

飯田の今とこれから

飯田は『日本一住みたいまち』になる！

佐藤 健 (高38回)

日本一住みたいまち

「2050年、飯田は日本一住みたいまちになる」というこのイラストは、私が市長選のマニフェストで使ったものです。

「日本一」とは随分大きく出たじゃないかと言っている人が、今年1月に



2050年、飯田は日本一住みたいまちになる



●さとう・たけし
昭和42年10月生まれ。鼎小、鼎中卒。平成3年自治省(現総務省)入省、霞が関勤務のほか、秋田県庁、鳥取県庁、大分県庁に勤務経験。令和2年10月第10代飯田市長に就任。

出版された宝島社の「田舎暮らしの本」住みたい田舎ベストランキング2023では、5万人以上10万人未満のまち総合部門第1位になりましたし、先日放送された「東大王」というテレビ番組でも、今移住したいまちランキング1位として取り上げられています。

目指すべきは「上質なローカル」

近い将来、飯田にはリニアの駅ができることとなります。そうすると、品川〜飯田間が45〜50分、名古屋〜飯田間が25〜30分という破壊的な時間距離の短縮が起こります。

このリニアをどう迎えるかということですが、私としては、飯田を東京のコピーのようなまちにはしたくないと思っています。いたずらに都市的なものを追い求めるのではなく、飯田の自然風土、文化、先人の皆

さんが築いてきた「暮らしの豊かさ」をしつかり守っていくという視点を大切に、リニアの利便性とこの地域の「らしさ」を兼ね備える『上質なローカル』を目指す、と申し上げています。

その際、キーコンセプトとなるのが、「グリーンリカバリー」という考え方です。これは、コロナ後の社会の在り方としてヨーロッパを中心に提唱されている考えですが、従来と同じ経済社会構造に戻すのではなく、大量生産・大量消費・大量廃棄の経済システムを見直し、行き過ぎたグローバルゼーションを是正し、自然と共生したまちづくり、自然エネルギーの拡大による脱炭素社会、環境にやさしいものづくりなどの考え方を核とした社会を目指す、というもので、私としては大変共感しているところです。

Sustainable ♪ Survivable なまちIDA

リニアの駅前には、飯田らしい、信州らしい「森」の雰囲気をもった空間にしたいと考えています。その象徴が木製の大屋根で、これを起点に森林資源の循環を起こしていきます。

リニアの二次交通には、空飛ぶクルマも取り入れたと思います。飯田は航空機産業に取り組んできた

下地がありますので、空飛ぶクルマについては利用の側面と産業振興の側面の両面から積極的に取り組みたいと考えています。

信州大学の新学部誘致の話は見送りになってしまいましたが、新たに、水と太陽光から光触媒を使って水を創る信州大学の研究の実証タウンを飯田に、という話があります。世界的に大きな意義を持つ研究の実証タウンに飯田が選ばれば、実に面白いことになってきます(令和5年12月末に国の支援事業として正式決定)。

水・空気・日光・森林という人間の生存に必要な資源が揃い、食料もある程度生産できる飯田下伊那は、それを地域で循環させる仕組みを作れば、より sustainable (持続可能) なまちになります。

加えて、2つのアルプスに守られて安全性も高いですし、コミュニティ(市民力)がありますから、いざというときのレジリエンスも高い。私は、日本全体で最後に生き残るのは飯田だと真剣に思っています。生き残るまち・Survivable City IDA だ。

さらに、伝統芸能の宝庫であり文化度も高い。あとは、自己肯定感がもう少しあれば。

2050年、飯田は「日本一住みたいまち」になっていると確信しています。